

男子部中等科・高等科

「表現とは何か―美術の分野を切り口として―」

酒井 恒太

本課題では、“表現とは何か”という問いに対し、制作活動を通じて各々の答えを導くこととした。創作においては、一定の期間同じ課題に取り組む時間が不可避であるという点において、身体性を通じたより深い内省に繋がると考えた。生徒は課題に沿って内容を設定し、約二週間という短い期間ではあったものの、課題に真摯に向き合った。そして自分なりの答えを、造形表現としての作品の制作および展示、言語表現としてのプレゼンテーションによって報告を試みた。学業報告会期間を通じて、自分自身の思想や世界観といったものを少しでも自己理解する良い機会が得られたと、生徒たちの様子から実感することができた。

I. はじめに

今回の課題では、“表現とは何か”というテーマを設定し、制作を通じて一人一人が自らの答えを導くこと、そしてそこに至るまでの経緯や時間を何よりも大切にしたいと考えた。生徒は今の自分に向き合い、自問自答を繰り返しながら作品を作り上げる。いわば抽象的な内面への問題に対して、造形を手段として表現することを試みた。美術という切り口を活かした考察として、各々の関心に沿った内容を設定し、積極的にかつ深く取り組むことが期待され得ると考えた。



〈電気工具を使って大きな形を出す。〉

それをどう解決していくのかを導くことは、学びの導入として非常に重要であると考えたためである。



〈完成のイメージを考える。〉



〈全体のバランスを考える。〉

II. 準備と取り組み

おおむね二週間ほどの準備期間を使って制作活動をおこなった。まず制作に入る前に、一人一人と入念な話し合いの時間を設ける。それぞれの資質に合った手法を選択すると同時に、そこから自己の表現へと繋げるにはどういった問題があるのか、また

今回の課題では切り口を美術としたが、特に造形表現としてのファインアートでは、実際に制作を進めるに従って、予定通りにことが進むことはほぼ無い。これはむしろ創造することの宿命ともいえるが、常に変化する目の前の問題に対して、ただ最善を尽

くすことが要求される。しかしこの時間の連続によって、アイデアが身体感覚を通じてはじめてリアリティをもち始める。このような、一種の自問自答を繰り返す時間の中で、自身の思考も少しずつ深化してゆく様子を、生徒たちに見ることができた。



〈形を確認しながら彫り進める。〉



〈自分を見つめる。〉



〈細部の調子に気を配る。〉

以下に、各々の生徒の取り組みを列記する。

【中等科】

〈一年〉

「りゅうとドラゴン」／多色木版（小川陽南太）

〈二年〉

「この世にない世界で」／油彩画（内田 颯）

「男子部の一年」／木彫レリーフ（西山 馨）

「虹色の龍」／木工（高田空弥）

〈三年〉

「見つめる少女」／木彫（竹川真幸）

「Enormous」／木彫（劉 眞豪）

「支える」／木彫（劉 眞豪）

「Midnight sight」／木彫（劉 眞豪）

「ヤマネコ」／木彫（劉 眞豪）

【高等科】

〈一年〉

「移ろう時間」／着彩ドローイング（堀内和大）

〈二年〉

「学園生活記録」／漫画（大串有朋）

「16歳」／ドローイング、アクリル画（小野直也）

「記憶の柱」／木工（中畝健登）



〈絵の具を乾かす。〉



〈形に色をのせてゆく。〉

Ⅲ. 報告内容

形式としては、作品展示とプレゼンテーションの二通りをおこなうこととした。昨今の社会においては、自らの考えや感じたことを相手に伝える手段として、言語、特にプレゼンテーションする技術が求

められる時代になったことを痛感する。これを受けて、造形表現のみに留まらず、言語表現力も同時に養う良き学びの機会にしたいと考えた。

先述の通り、生徒たちはそれぞれの関心や資質に沿った手法を選択したため、大きく分類すれば平面と立体ではあるが、表現としては実に多彩なものとなった。そのため、展示空間を創るにあたっては、個々の作品の魅力が最大限に引き立つように、且つ空間全体としての印象も損なわないように特段の配慮を要した。基本的には、鑑賞者の動線を意識しながら、入り口から奥に向かって背丈の高いものを、また立体作品は出来る限り空間の中に出すことで、全体の印象に豊かな奥行きを与えた。また傾向の違う作品をあえて隣接させることで、コントラストの効果を活かし、互いの魅力を引き立たせる配置を意識することも、また重要な課題であった。

通常展示を目的とした空間とは違い、制限も多く苦勞したところもあったが、何よりも生徒たちの作品が充実した表現に満ちていたことが、良い展示空間へ繋がったと感じている。また発表については、一人一人が考えたことをプレゼンテーションし、互いの考えや価値観を共有する良い機会となった。



<何度も刷りを繰り返す。>



<コマ割りを考える。>

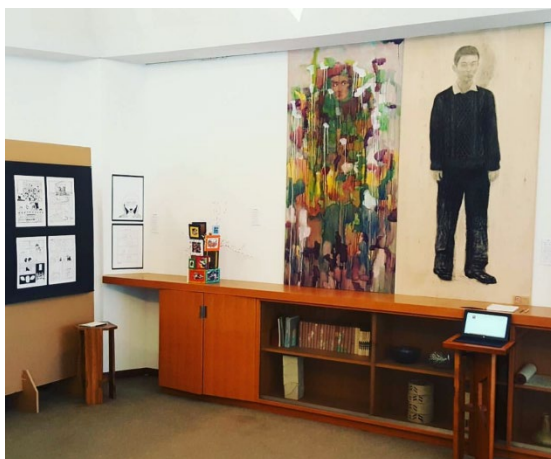
IV. おわりに

学業報告会において、制作活動を通じた自己研究をおこなう課題は新たな試みであった。特に美術を切り口として“表現とは何か”という問いは、非常に抽象的であるために、終局的には客観性をもった一つの答えや結論を導くことはできない。それは問いそのものが、実験や調査研究を重ね、結果を数量化し結論を得るといった解決方法を許さないからである。むしろこういった分野においては、結果に至るまでの過程にこそ、研究の本質が見出せるといえよう。それは、人という存在には常に対一体性が孕むからこそである。創作は一種のインプットとアウトプットの絶え間ない相互活動の連続である。思想は抽象的な主観として形成され、そこに制限はなく、頭の中では全て同時に成り立つ。しかしそれを現実に再現しようと試みれば、環境や物質、身体性など、自然の摂理という大きな物理的制約、つまり客観性が必ず要求され、そのままアウトプットすることがほぼ不可能であることを理解する。また或いは、アウトプットを通じて思想の不完全さに気づくこともあろう。いづれにしても、これらインプットとアウトプットを絶え間なく繰り返す相互活動の過程において、創意工夫の精神が培われることにこそ、美術を学ぶ意義があると信じている。

“表現とは何か”を一人一人が自問することは、自己を客観視すること。そしてまたそれを主観へフィードバックすること。ただその繰り返しでしかない。しかし、このような今回の学業報告会期間を通じて、生徒達一人一人が自己の思想の深化を試み、生きる力を自ら育む様子が十分に見受けられたことは、美術科として非常に尊い時間を共有できたと感じている。



〈作品展示風景①〉／ドローイング



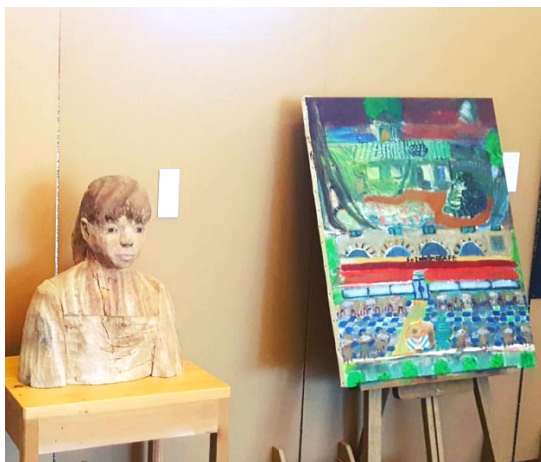
〈作品展示風景②〉／漫画、木工、ドローイング



〈作品展示風景③〉／木彫レリーフ、版画、木彫



〈作品展示風景④〉／版画、木彫



〈作品展示風景⑤〉／木彫、油彩